

「長く続いた戦争と人々の暮らし」

6年 社会科

I 実践の目指しているもの

○教材化にあたって

日常生活の中に「平和」について考える機会は少なからずある。しかし、子どもにとって戦争はどこか遠い世界で起きていることという意識がある。そのため戦争とは何か、平和ではない状態とはどのようなものかが漠然としている。また、戦争体験者を身近にもつ子はほとんどなく、戦争について直接、話を聞く機会はあまりない。

そこで、単元を通して授業の振り返りの際に、「平和」にどれだけ近付けたのか、もしくはどれだけ離れてしまったのかを、子ども一人一人が視覚的に捉えられるよう、「平和メーター」として表した。さらに、学習したことを踏まえて、「平和」の実現のためには何が必要なのかを考える時間を単元の最後に設定する。そうすることで、漠然と捉えていた「平和」について、子どもが具体的な言葉で説明できるようになるなど、考えを深めることができると考える。

○資料の活用方法

子どもが「戦争」とはどのようなものか、そして「平和」とはどういうことなのかを具体的に捉えられるように、「札幌平和ミュージアム」や「札幌市民の戦争体験」の資料を活用した。児童の実態に合わせた資料を教師が提示することで、札幌や北海道でも戦争の被害があったことや、人々の生活が制限されていた実感をもつことができた。

本時では残留孤児として、中国で育てられた人々が日本に帰国した後に、自分の本名も肉親のことも分からず、苦しんでいるという事実を取り上げる。その理由を追究することで、戦争は終わった後も人々に多大な影響を与えることを理解し、「平和」の大切さを改めて実感できた。

II 研究の内容

1 単元の目標

- ・日中戦争、太平洋戦争、そのころの国民生活とそれらに関わる代表的な文化遺産に関心をもち、意欲的に調べることができる。（関心・意欲・態度）
- ・調べたことを比較したり、関連付けたりして、戦争によって国民生活が大きな影響を受けたことを適切に表現することができる。（思考・判断・表現）
- ・戦争を体験した人の話や文化財、地図や年表、その他の資料から、戦時中や戦後の国民生活について必要な情報を集め、読み取ったものをまとめることができる。（技能）
- ・国民が大きな被害を受けたことや戦場になった地域に大きな損害を与えたことを理解することができる。（知識・理解）

2 単元の指導計画（7時間扱い）

戦争体験者の話を聞いてみよう		戦時中、人々はどんな暮らしをしていたの？	空襲によってどんな被害を受けたのだろう？
札幌の被害	想像を絶する戦争の体験	戦争一色	甚大な被害
難しい生活	戦争の体験	戦時体制	北海道でも
単元の学習問題	長く続いた戦争は、日本や外国、人々にどのような影響を与えたのだろう？	生活のすべてが戦争のために制限されたんだね	日本各地で空襲による大きな被害を受けたんだね
戦争が起こったきっかけはなんだったのだろう？	満州事変	戦争はどのように終わったのだろう？	
景気の悪化	多くの日本人が中国へ	沖縄の地上戦	15年に及ぶ戦争の終結
多くの人が中国に進出し、資源を得ようとしたんだね	多くの日本人が中国へ	広島・長崎に原爆	
どうしてたくさんの国が参戦したのだろう？	多くの日本人が中国へ	戦争が終わったのに、どうして中国残留孤児の人々は苦しんでいるの？	
ヨーロッパでのドイツ軍の侵攻	ドイツ・イタリアと軍事同盟を結ぶ	満州からの軍の撤退	帰国後も
太平洋戦争が開戦		国境の争いが終わっても、人々の戦争の影響は終わらない	戦争が終わっても、戦争は人々に多くの影響を残したんだね

3 本時について

(1) 本時の目標

戦争が終結したにもかかわらず、中国残留孤児の人々が戦争の影響を受け続けている理由について調べ、「平和」の実現のために必要なことについて考えることができる。

(2) 本時の展開 (7/7)

(前時まで) 広島と長崎に原爆を落とされ、1945年8月15日に長かった戦争が終結し、日本は平和への第一歩を踏み出そうとしていることを捉えている。

1945年8月15日 玉音放送

教科書 P139 写真
玉音放送を聞く人々

1981年～ 中国残留孤児の人々の親探し開始

教科書 P139 写真
中国残留孤児となった人たち

戦後36年経って

ようやく戦争が終わった
やっと平和への第一歩

戦争は終わったのに…
とても辛そうだよ…

戦争が終わったのにどうして中国残留孤児の人々は苦しんでいるの

戦争が終わって

- ・満州国はもう日本のものではない。
- ・日本軍の撤退。
- ・難民生活で食料もない。
- ・満州に置き去りにされた。

戦争の爪痕

日本に帰国しても

- ・幼いころから満州で育ち中国人に育てられたので日本語が分からない。
- ・親の名前も自分の本名も分からない。

国同士の争いが終わっても、
人々への戦争の影響はまだ終わらない

日本が「平和な世の中」になるために、必要なことは何だろう？

誰もが食べ物や住む家などに困らず、当たり前前の生活ができる。

物がたくさんあり、便利な世の中になってほしい。

「平和な世の中」
なるために

戦争の苦しみが消えるのは難しいが、幸せを感じられる世の中。

戦争を再び繰り返さないこと。苦しみや悲しみを感ぜさせない世の中。

日本はどのような「平和」を目指したのか
戦後の日本の様子を探っていこう。

- ・中国残留孤児となった人々の写真を提示し、戦争が終わってから時間が経っているのに、戦争の影響を受けている人々がいることを捉える。

- ・札幌市民の戦争体験～平和に関する学習資料②第一章「ソ連の参戦で満州は…苦難の帰国」の最終場面を読み、当時の中国残留孤児の様子について理解する。

- ・「平和メーター」を活用し、日本が「平和な世の中」になるために何が必要なのかを交流する。

- ・「当たり前」や「幸せ」などの抽象的な言葉についてはより具体的な言葉を使った表現となるよう促す。

4 実践のポイント

【成果】

- 戦争について具体的な体験談を聞く機会が少なくなっている今だからこそ、「札幌平和ミュージアム」の動画資料は、とても有意義なものだった。戦争の体験談を聞く機会を単元の導入に設定することで、戦争についての漠然とした知識ではなく、資料から学んだことを生かした発言が単元を通して増えていった。
- 「札幌市民の戦争体験」を教室に置いておくことで、読書の時間に読む子どもが多く見られた。学習後も戦争について調べるなど、主体的に学びを進める姿勢が育った。
- 「平和メーター」を活用することで、平和や戦争に対して、自分と友達、それぞれの見方・考え方があることを実感できた。
- 中国残留孤児を取り上げることで、「国同士の戦いの終結＝平和の実現」ではないことを子どもが理解できた。また、日本に帰国しても、中国に留まったとしても数多くの苦難があった事実から、中国残留孤児となった人々の思いを、様々な立場から考えることができた。

【課題】

- 中国残留孤児を取り上げる上で、押さえなければならない点として「アイデンティティの消失」が挙げられる。ある日突然、自分の国籍が違っていると分かった時の中国残留孤児の人々の思いを子どもに実感させるための手だてを考える必要があった。
- 「平和メーター」は有効な手だてではあるが、数値化に当たって子どもの根拠や判断を明確にする必要があった。全体交流だけでなく、グループ交流等も取り入れることで、子どもが友達の思いを知ったり、平和に対する捉えの違いをより一層明確にしたりすることができる。

【課題探究的な学習に関わって】

本実践では「平和メーター」を活用することで、子どもの考えを数値化し、交流の根拠とした。子どもたちが友達と学び合うためには、子どもが考えたいくなる状況を生み、学習意欲を高める必要がある

本実践では、一人一人が「平和メーター」に記した数値や根拠に差が生まれることが学び合いへの意欲に結び付くと考えた。単元を通して平和の意味について考える活動に取り組むことで、お互いの考えに関心をもちながら学習に向かっていた。しかし、本時では「日本人としての立場で考える子」、「中国残留孤児の立場として考える子」という視点のズレがあり、学び合いを成立させるための共通の土台をつくることができなかった。この視点の違いを教師の関わりによって整理することが、子どもの意味理解につながると考える。

また、中国（特に満州国）での人々の暮らしが分かる資料を用い、中国残留孤児の人々が置かれていた状況について学ぶ場を設定した。そのため、中国残留孤児の人が、「日本に帰国した場合」と「中国に留まった場合」の違いを理解することができた。